

上の道をどんなことがあっても、何時間かかっても駅まで行くようにと言われ、死を覚悟の行進であった。

ぶじ駅までたどりつき、安堵と疲労でみんな地面に座りこんで汽車のくるのを待った。そのとき中国人の太太（たいたい＝奥さん）が西瓜を売りにきた。みんな一切れずつもらった、あのとときの西瓜の味は今でも忘れはしない。

親日家の駅長さんのはからいで、一車両私たちのためにあけてくれ、省本部のある通化へ向かったのだが、翌昭和二十一年二月三日、恐ろしい通化事件が起こり、主人はじめ、多くの日本人も中国人も犠牲になって死んだ。春になって、ハシカが大流行し、栄養失調から肺炎を併発して、葉はなく、欲しがるリンゴ一つ食べさせることもできず、長男、次女とついに病に勝てず、あいついでこの世を去った。

何をされても抵抗できない、逆らえば殺される。どれほど辛く情けない思いをしたことか、今の若い人達には想像もつかぬことであろう。現在日本は経済大国と言われ、世界的にもめざましい発展を上げている。

平和の有難さを心底かみしめている今日この頃の私である。

夢はるかな旅順

神奈川県 中 沢 京 子

旅順市で終戦を迎えた。美しい山や丘、アカシアの花が咲き、少し汗ばんで歩くと港がある街で、八人家族の長女として、のんびり育っていた。十歳だった。国情を感知していたとはいえ、教職にあった父は敗戦を痛み、落胆した。家族を座らせて理解しがたい口調で話をした。数個の小袋を母がふるえながら受け取り、危機には揃って生命を断つことを教えられた。

ソ連軍が侵入し、生活は激変した。中国人の顔つきがかわり不安だったが、まもなく三つの国「人」としての交流もあった。持ち帰ることが不可能な着物、離人形、琴、父のバイオリンなど、つぎつぎにあげてしまった。ソ連の若い兵隊が大きな靴のまま襲いこんだが、すでに

親しくなっていた将校が制し、水を飲んで引き下がった。最大の悲しみは、三歳の妹、洋子が満足な治療も受けられず、旅順病院で逝ってしまったことだ。五人の兄弟のしあわせが今日あるのは、洋子の犠牲があったからだと言っている。

大連へ移住するまでの二か月あまり、登校のない日々の子どもの目に映った毎日の思いはつきない。厚い三角巾を足に巻いた将校や、梅ちゃん（中国人のお姉さん）猫のマリ、レンガ建ての家に別れを告げた。バスケットにマリを入れて、いつまでも離さなかった。追われるように移住する姿は、まるでのちに見た西部劇の一シーンのように痛烈だった。馬匪賊がくる噂で、先を急いだ。

大連市では一年五か月、住居は三回替わった。日本人が多く、みんな働いて帰国の日を持った。大きなロシア建築の二階を借り、日本橋小学校へ通った。四十日ほどで接収され、引越した。一年いた最後の住まいは、南に路面電車が走り、三越が見えた。北に大連駅があり、その広場で大ぜいの人物が物を売っているのが三階の窓から眺められた。家財のない家庭は、二部屋でも父の造っ

た暖房に寄り合い十分暮らせた。中国語ができた父は、毎日仕事でいそがしかった。学校は、父からも私達からも、もぎ取られた形だった。中国人が子どもを欲しがっているから、外へ出てはいけないと強く言い渡された。夕暮れに発砲の音を聞いたり、ビルの片隅で生命を消す少年の姿も見た。名前だけでも聞いておけばよかったと母は悔やんでいた。

昭和二十一年三月、博多から山梨へ帰郷して富士駅で一泊した。本籍（甲府）が空襲にあり、家が全焼していることを知った。再び七人の重みが父母にかかった。伯母の家に寄宿し、父が復職、子どもは学年を遅らせて通学できた。

焼け跡に家を建て、先に帰国した祖父と八人との再々出発は終戦から満三年たった。経済と、学力の遅れに、親と子も戦った。母は常に台所で働き、遅れを取り戻すために一生懸命頑張ってくれた。昭和二十九年就職し、三十六年に結婚、二人の娘を得た。

テレビの天気予報の旅順を見ながら夫に、そこでの話をする。旅順への再訪を願いつつ母も父も、平均寿命

に、はるか届かず、世界した。

ああ、弟よ、妹よ

岐阜県 河野 忠 昭

「とき子が死んだ」雨、露をしのぐだけの真つ暗な建物の中で、しぼり出すように母が言った。その姿を鮮明に覚えている。

「牡丹江省市鉄道自警村において出生」私は、親切な満人たちに囲まれて、ごくあたり前の幼年時代を過ごし、いた。私の平和が破られたのは、国民学校一年生の八月の初旬のことであった。

ソ連軍が数時間後には攻めてくる。すぐに鉄道で逃げろ、との突然の命令に、母は子どもたちの手を引き満人の出してくれた馬車で、自宅から一里ほどの駅へ向かった。母の荷物はゆで卵、おにぎりを数個、とき子のおむつ、子どもたちの夏の着替えと預金通帳、そして手持ちの現金だけであった。列車はすでに屋根の上まで満杯の

状態であった。が駅長（満人）の好意で、新たにつながれた有蓋車一両に私たちは辛うじて乗ることができた。

幾昼夜、その列車に揺られていたことだろうか。ある駅で突然全員列車からおろされた。そこで初めて、戦争は終わった、と聞かされた。そのまま近くの粗末な建物の中で、平穏な一週間を過ごしたのであるが、ある朝突然、満人の暴徒達が、現れて私たちから金目のものはすべて奪っていった。さすがに女、子どもの着物や、あかん坊のおむつには手を出そうとはしなかった。が、男たちはふんどしまで奪われ、抵抗しようとした者は皆、半殺しの目にあつた。こんな危険なところにはおられないと、その時から私たちの必死の逃避行が始まった。

私は自力で、母はとき子をおんぶして猛（四歳）の手を引いて、とにかく走った。前年十一月に生まれたとき子が、母の背で、キャッキャッと無邪気な笑い声を上げていた。畑の真ん中で夜をあかし、盗んだカボチャやジャガイモをナマのまま食べた。火をたけば人に見つかってしまふからだ。食うや食わずの日々の中、だれかが切れた電線を見つけて言った。「もう、駄目だ、集団自